

表象

〔ギ〕 phantasia 〔ヘ〕 representatio 〔仏〕 représentation

もともとは、あるものをふたたび (re) あらわす (presentio) 作用ないしそのようにしてあらわされたイメージを意味する。

アリストテレスは、感覚と思考とを区別し、前者はあらゆる動物に共通にそなわるはたらきだが、後者はロゴスをもつ動物のみに見られるはたらきだと述べたうえで、表象はこのいずれとも異なるものであると主張した。「表象は感覚なしには生じず、判断は表象なしには生じない」。アリストテレスは、表象を感覚と思考の中間に位置づけ、表象とは「現実態にある感覚から生じる運動である」という定義を与えている。

ロックにはじまる経験論の流れにおいて、〈観念 (idea)〉の名のもとに語られるものは、おおよそのところカント以降の哲学において、〈表象 (Vorstellung)〉に対応する内容を有していることみなすことができる。ideaに対応するドイツ語Ideeは、通常〈理念〉と訳されることが多いからともわかるように、独特な意味あいでも用いられるのがいまでは通例となっている。

カントにおいては、さしあたり認識主観にとつてのいつさいの意識内容が表象と呼ばれるが、さらに細かくは以下のように

区分されている。すなわち、〈表象一般 (representatio)〉のもとに意識的な表象としての〈知覚 (perceptio)〉があり、知覚がもつぱら主観とのみかわるばあいは〈感覚 (sensatio)〉と呼ばれ、客観的な知覚は〈認識 (cognitio)〉と呼ばれる。認識は〈直観 (intuitus)〉と〈概念 (conceptus)〉に区分されるが、前者は対象と直接かわり、後者は表徴を介して対象と間接的にかかわる。最後に、経験を越える概念が〈理念〉である。このように、カントにあつては表象の覆う範囲がきわめて多岐にわたっているため、他面で曖昧さが残るのも事実である。

十九世紀になるとトウルドウスキが、ブレンターノの志向性理論を踏まえつつ、『表象の内容と対象』（二八九四年）のなかで、表象にかんして、〈表象作用 (Vorstellen)〉と、表象のうちで表象されたものとしての内在的〈内容 (Inhalt)〉、表象をとおして表象されたものとしての超越的〈対象 (Gegenstand)〉という三つの意味を区別し、これが一般的になっていく。

フッサールは、ブレンターノやトウルドウスキの見解を評価しつつも、それらを批判的に摂取していくなかで、独自の現象学の立場を確立していった。
(小須田健)

●参考文献

アリストテレス『心とは何か』桑子敏雄訳、講談社学術文庫
カント『純粹理性批判』天野貞祐訳、講談社学術文庫